鷺図

SAGIZU

基本情報 ■作者：伊達宗村(1718～1756) ■時代：江戸時代 ■寸法：縦41.2cm 横53cm

学芸研究員の目

学芸研究員
砂金 春奈

作者の宗村は、仙台藩の家臣は浪費が多いようだと認識しており、奢侈は貧窮の要因であると考え、倹約令を毎年のように出していたといいます。

特に宗村の代には、災害や凶作が頻発したこともあり、財政は窮迫し、藩主の身の回りも切り詰めて歳出減をはかったといわれています。

この資料のココがすごい!!

少ない色彩の中で、白鷺の美しさが際立ちます。

お気に入りポイント

シンプル故の美しさをご堪能ください。

シンプルな美

伊達の芸術

本作品は、仙台藩6代藩主伊達宗村(だてむねむら)によって描かれた絵であると考えられる。描かれているのは白鷺であるとされている。

伊達政宗以来、歴代の仙台藩主たちは教養人のたしなみとして和歌をはじめとする文化活動に力を注いできたのである。

鷺図を描いた宗村とは

伊達宗村は享保3年(1718)に吉村の4男として生まれ、幼名を勝千代丸といった。享保9年(1724)12月に總次郎久村(そうじろうひさむら)と称したが、享保16年(1731)に元服して、当時の将軍であった徳川吉宗公から偏諱(へんき)を賜り(将軍あるいは大名などが、家臣の功ある者あるいは元服の際などに名の一部を与えること)「宗村」と改め、従四位下侍従越前守(じゅしいのげじじゅうえちぜんのかみ)に任じられる。寛保3年(1743)には陸奥守となり、仙台藩の6代藩主となった。延享4年(1747)には従四位上(じゅしいのじょう)に叙せられ、左近衛権中将(さこのえのごんちゅうじょう)に任ぜられ、宝暦6年(1756)5月に宗村は39歳でこの世を去った。

宗村は、延享元年(1744)に藩主として初入国すると、24ヵ条の条目を発して家臣の綱紀粛正(こうきしゅくせい)をはかり、財用方の役人に倹約を命じて放漫財政を戒め、この後毎年のように倹約令を出している。

藩の美術を支えた手前絵師—宗村の時代は

17世紀後半、江戸幕府が抱え絵師の制度を確立してからは、仙台藩でも抱え絵師の組織化を実施し、手前絵師と称して日常的な作事を中心に雇用していた。

享保19年(1734)、将軍家から伊達宗村の妻として輿入れする**利根姫**[*1](とねひめ)のために江戸にある中屋敷の御守殿が造営された際、江戸在住の狩野派画家である狩野探常や松本随川とともに活躍したのが、藩が独自に抱える「手前絵師」である松原探梁(まつはらたんりょう)・菊田栄羽(きくたえいう)・荒川如慶(あらかわじょさい)の3名であった。手前絵師は定例の絵画制作や古画の模写や鑑定など制作の場と内容は多岐にわたっており、特に肖像画制作は重視されていた。肖像画制作は5代藩主吉村までの江戸狩野派に代わり、6代藩主宗村以降、手前絵師である菊田家を中心に起用されていくことになる。

学芸研究員 砂金 春奈
実習生 梶山 咲希

参考文献
祖田浩一(監修)、芳賀登、中嶌邦、一番ヶ瀬康子『日本女性人名辞典』日本図書センター 1993
仙台市史編さん委員会編『仙台市史 特別編 美術・工芸』仙台市 1996
仙台市史編さん委員会編『仙台市史 通史編5 近世3』仙台市 2004
内山淳一『国宝大崎八幡宮 仙台・江戸学叢所28 仙台藩の絵師たち』大崎八幡宮 2011

用語解説 詳しくはP26へ

*1 利根姫